

幸のひな祭り

三月三日は、ひな祭りの日。

幸は朝からそわそわしている。

秋から習ってきた踊りをお母さんに見せるつもりなのだ。

「きょうはわたしのひな祭り。でもね」

幸はおばあちゃんにそっと耳打ちをする。

「おはよう。いよいよ今日だね。」

でもどうしたんだい」

おばあちゃんは幸の顔をじっと見つめた。

「だって、初めてだよ」

「ああ。そうだね。幸はお母さんに見せたくて、一生懸命におけいこをしていたよね」

「それでも、ちよっぴり心配」

おばあちゃんは大丈夫を二回言って幸の肩をたたいた。

幸のお母さんは踊りの名手、お

とうさんは笛の名人だった。秋に

なると、季節の行事で二人は春ま

で家には帰らない。その間、幸は

おばあちゃんの家で過ごす。お母

さんは、春のひな祭りには家に帰ると約束をしていた。

いよいよ今日がお母さんとお父さんが帰ってくる。この日に、幸

のひな祭りをするのだ。

幸は秋に、お母さんに会いに行つてから踊りを始めた。幸はお母さんの踊りを見て無性に踊りたいと思つた。そしておばあちゃんに頼み習い始めた。

「幸の踊り。ひな祭りの日にお母さんに見せてあげてね」

おばあちゃんは、幸が踊りを始

めても止めてしまわないようにとお母さんに見せる日を決めたのだ。

秋に見たお母さんの踊りは、お

父さんの笛に合わせてゆつたりと

はじまった。だんだん体を激しく

動かし、最後には鳥が羽ばたくよ

うに空へと消えていった。

後には肩にかけていた衣と残り香がただよっていた。

幸は「あーっ」と口を開けたまま、じつと消えていった空の彼方を見続けた。

しばらく何も言わない幸に、お

ばあちゃんが肩をゆすつた。

「きれいだあ。消えて行つたよ」

我に返つた幸が、おばあちゃんを見ずに言つた。

帰りみちで、幸はおばあちゃんにわたしも「踊りがしたい」とし

きりに言っていた。

家に帰つた幸がさみしそうにしていたので、幸が毎日踊りをする

ように、おじいちゃんが「習わし

てやれ」とおばあちゃんに言つた。

幸には「幸の踊り、お母さんに

見せてやれ」と言ってくれた。

それから幸は「ひな祭りに見せ

る」と心に決めて、毎日踊つた。「これでさみしさを少し忘れて、

これからつながつたかのう」と、しばらくしてからおじいちゃん

がぽつりと言つた。

朝からおばあちゃんはひな祭りのごちそうを作っていた。

幸は手伝わずに、そわそわして

落ち着かない。

「さあ、着物を着かえてから待とうかね」

おばあちゃんが幸を誘つた。

鏡の前で幸は、日頃着たことのない着物姿で人形のように立っていた。

「いよいよ私のひな祭りね」

幸の心臓はドキドキして、顔はこわばっていった。

「ただいま、幸。帰ったわよ」

玄関からお母さんの声がした。

幸は、足元を着物でバサつかせながら飛びだしていった。

「まあ幸の晴れ姿ね。きれいだわ」

お母さんはぎゅっと幸を抱きしめて言った。

「うん。お母さんに踊りを見せるの。一生懸命におけいこしたよ。だから見てね」

幸はお母さんの腕の中でなんとも言った。

ひな飾りの前で、家族が久しぶりに集まった。ごちそうを食べ、家族一人一人のことを話した。

いよいよ幸の番になった。

「お母さんお父さんに、わたしは

今日の日にむけて踊りを習い、見せることにしました。お母さんみたいに踊れるように頑張ります」

幸はそう言うと、ひな飾りの前で、手をゆつくり上げ腰を下げた。

幸は、秋に見たお母さんのポーズを真似て、自分の舞姿を見せた。最後に肩にかけた衣をふわっとはね上げ、お母さんを見て笑った。

しろやま会員

かど まさこ

